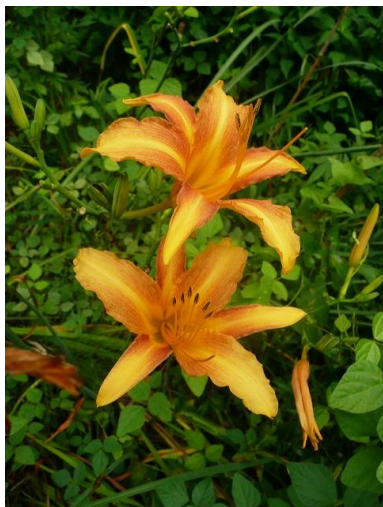




環境改善目標1

希少植物の生息域外保全 活動の意義と育成する“和の花”について



2026年度（新規扱い分）
フタバアオイ フジバカマ
ヒオウギ キクタニギク
ノカンゾウ ノハナショウブ



活動の背景 希少になっていく野生植物

京都府レッドデータブック(RDB)の2022年改訂版レッドリスト(RL)が2023年2月に公表されました。植物の掲載種数は、改訂ごとに増えています。原因は様々ですが、多くの植物の自生地の環境が危機にあることを示します。

(表) 京都府RDB(RL)に掲載された種子植物の種数の推移

カテゴリー	2002年	2015年	2022年
絶滅種(※1)	62	45	46
絶滅寸前種	157	217	252
絶滅危惧種	142	222	236
準絶滅危惧種	142	180	176
要注目種(※2)	54	75	78
ノミネート種数	557	739	788
ノミネート割合(※3)	約23.7	約31.4	約33.5 (%)

※1……絶滅種数の2015年の減少は調査による自生地の発見があったため。

※2……外来種を除く要注目種の数

※3……ノミネート種数が府内の種子植物約2,350種に対する割合(2015年版「全国的に見て非常に高い数値」)

ありふれていた…はずの植物が失われています。例えば……

消える秋の七草（七種）

萩の花 尾花 葛花 瞿麦の花 女郎花 また藤袴 朝貌の花
——山上憶良（万葉集・巻八）



ハギ(マメ科、写真は
ナンテンハギ)



カワラナデシコ（ナデシコ科）
京都府RD記載ないが減少



フジバカマ（キク科）
京都府RDB:絶滅寸前種



ススキ(イネ科)



クズ(マメ科)



オミナエシ（スイカズラ科）
京都府RDB:準絶滅危惧種



キキョウ（キキョウ科）
京都府RDB:絶滅寸前種

希少植物保全の2つの方法について

希少な植物(生物)の保全には、2通りの方法があります。基本的には、生態系の中での保全＝**生息域内保全**が望ましいのですが、自生地の環境が大きく変化する中での緊急的な措置として、また、生息域内保全に至るまでの手段として、**生息域外保全**はますます重要となっています。

生息域内保全 (自生地の生態系の中での保全)

(例) 里地・里山の管理と利用、獣害対策(シカによる食害は京都では特に深刻)、外来種(国外・国内)の駆除、水質保全……

生息域外保全 (自生地ではない場所での保全)

(例) 系統保存(交雑を避けながら長く栽培・保存)、種子・胞子保存、園芸的な保存(植物に親しむ生活文化を背景にした園芸家等による栽培)、バイオ技術による培養……

※市街地では、容器栽培での育成も有効。繁殖技術の継承も大切。

国際自然保護連合 **生息域外**管理は、**生息域内**管理を補完するツールとなり 非常に重要な役割を担う可能性がある。

ローカルという
視点でみる

生息域外保全の重要性と留意点

◆国(環境省)レベルの対策(維管束植物)

生物多様性条約COP15で採択された「昆明・モンリオール生物多様性枠組」(GBF)を踏まえた「生物多様性国家戦略2023-2030」に基づく、絶滅危惧種(環境省レッドリスト)の生息域外保全等

・環境省と(公社)日本植物園協会の協定 (2017年～)

絶滅危惧種の保全における連携(生息域外保全の実施状況に関する情報の共有、種子保存、繁殖技術等の確立、自生地情報・遺伝情報の整備、野生復帰の研究等) 及び外来種対策における連携

(日本植物園協会は「日本産絶滅危惧維管束植物 1,200 種類(対象種の約 68%)について自生地情報を持つ個体を生息域外保全する」等の2030年目標を設定している。)

◆各都市(自治体)レベルで見ると……

環境省レッドリストで絶滅危惧の危険度が低い(記載がない)種でも、ローカルのレッドリストでは危険度が高い場合が多くあります(エリアが小さいため)。特に「秋の七草」のように、身近にありふれていたのに近年急速に失われているローカルな絶滅危惧種を掬(すく)い上げることが重要です。京都では歴史文化的な背景から、その重要性に気付く関係者が多いといえます。

<留意点>ある植物について、現在も自生地がすぐ近くにあるにも関わらず、「同じ種だから」という理由で他の地域から持ち込むと、その自生地の植物群落の遺伝的固有性(多様性)を脅かすことになりかねません。「生息域外」に持ち込んだ植物が、場合によっては「国内外来種」となりうることに注意する必要があります。

⇒「逸出」を防ぎ、第三者への譲渡は抑制的に

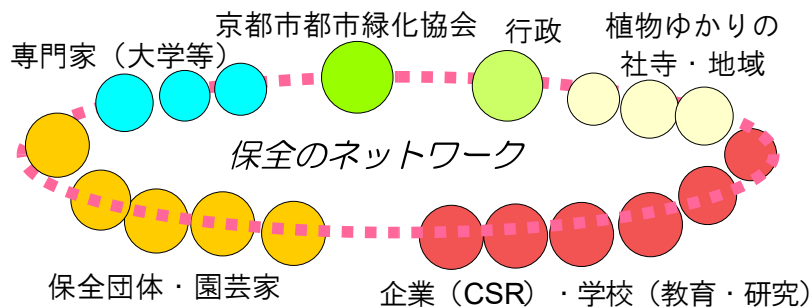
※3月1日付提供【別紙2-1】もご参照ください。

ネットワークで行う意義について

～危険分散・まちに広げる・関心を高める～

- ◆身近(都市部)で行う栽培……危険分散、レフュジア(避難地)となる

管理のしっかりした企業・団体、市民団体、専門家、行政などが協力しあうことによる保全と危険分散自体が大きな意義を持っています。



ネットワークのイメージ

- ◆社内・社外での広報……都市住民である私たちが、都市と生物多様性の関係について関心を高め、また周囲に知識を広める役割を担う。
- ◆この取組みが、自社、地域の緑化や都市の外での活動のきっかけにつながる。

希少植物保全の活動
(緑化協会の例)



京都新聞 2013年10月28日



2026年度に取り扱う植物(6種) フタバアオイ、フジバカマ、ヒオウギ、キクタニギク、ノカンゾウ、ノハナショウブについて

配布資料(3月1日)【別紙1-2】植物栽培方法等の比較表

(注1) 実生……種子から発芽した苗を育てること

(注2) 少なくとも平日(毎日)の管理ができる場合の育てやすさ

種名(科名)	レッドデータブックの掲載ランク	花期	自生地の環境	栽培環境・方法(容器栽培として)		更新・繁殖の方法 【交雑しやすい植物は実生(注1)を推奨しない】	育てやすさ(注2) 1(易)~5(難)
				日照	水やりの注意		
A フタバアオイ (ウマノスズクサ科)	-	3~5月	落葉樹林の下、谷間の法面	春先は明るい場所、5~10月は風通しがよく、熱のこもらない日陰に。	水はけの良い土で、蒸れないように。5月~10月は乾燥に注意する。	株分け、実生	1 2 3 4 5 ↑
B フジバカマ (キク科)	環境省準絶滅危惧(NT) 京都府絶滅寸前種	10月 (挿し芽1年目)	川の堤防、水田周辺などの明るい水辺	日当たり好む。盛夏の西日当たり好む。	盛夏は腰水灌水し、1日2回やる(どうしても不可能な日は日陰に置く)	挿し芽、株分け(親株の3年目以降は更新を推奨)	1 2 3 4 5 ↑
C ヒオウギ (アヤメ科)	京都府絶滅寸前種	7月中旬~9月	海岸の草地、海岸林、山の草地	日当たり好む。	乾燥には強いが、花期前・盛夏は日射と乾燥による葉やけに注意。	株分け、実生	1 2 3 4 5 ↑
D キクタニギク (キク科)	環境省準絶滅危惧(NT) 京都府絶滅危惧種	11月	乾いた川の法面、山麓の土手	日当たり好むが、盛夏の日射は苦手。短日植物であり、夜間照明の近くに置くと開花が遅れる。	乾燥にはやや強いが、盛夏の乾燥には注意	株分け、実生(親株の3年目以降は更新を推奨)	1 2 3 4 5 ↑
J ノカンゾウ (ススキノキ科 ノスレグサ科)	京都府絶滅危惧種	7~8月	日当たりのよいやや湿った里草地	日当たり好む。	夏は乾燥に注意。盛夏は腰水灌水する。	株分け、実生	1 2 3 4 5 ↑
L ノハナショウブ (アヤメ科)	京都府準絶滅危惧種	5月~6月	日当たりのよい湿原、湿った里草地	日当たり好む。	湿気を好み、乾燥には強い。夏は腰水灌水する	株分け	1 2 3 4 5 ↑

※比較的育てやすい植物種が多いですが、近年は、夏季の高温傾向、降雨日数の減少傾向などにより、油断はできなくなっています。それぞれの育て方について、栽培講習会など栽培セットをお渡しする際や、当協会の「花と緑の相談所」(相談日以外は随時、担当者)がご相談に応じます。(本資料最終ページをご覧ください。)

植物1 フタバアオイ (ウマノスズクサ科 多年草)



Asarum caulescens

ウマノスズクサ科 多年草

京都府RDB 記載なし **ご覧ください。**

花期 3 ~ 5 月。

日本固有種。本州、四国、九州に分布しますが、7つの県では絶滅危惧・準絶滅危惧種となっています。

- ・上賀茂神社・下鴨神社、松尾大社の社紋
- ・葵祭(賀茂祭)で使用(1万数千本)。
全ての参列者の衣冠、御所車などに「葵桂」を挿した飾りを付ける。

**※フタバアオイについての詳細は、
(一財)葵プロジェクト様の資料をご覧ください。**



斎王代と女人列 (写真提供 上賀茂神社)



上賀茂神社での「葵里帰り式」の様子
(例年5月上旬)

植物2 フジバカマ (キク科 多年草)



学名 *Eupatorium japonicum*

秋の七種(七草)の一つで、『源氏物語』など文芸にたびたび登場する。水辺を好みますが、現在、自生地はごく限られます。

葉には独特の芳香(クマリン)があり、香料や薬用にされ、古代から貴族の男女が衣服や髪にしのばせていました。海外との渡りをする蝶アサギマダラが蜜を好むことでも知られます。

環境省レッドリスト:準絶滅危惧(NT)
京都府レッドリスト:絶滅寸前種

萩の花 尾花 葛花 瞿麦の花 女郎花 また藤袴 朝貌の花
——山上憶良 (万葉集・巻八)

トピック

同じ万葉集では、元号「令和」の出典「梅花の歌三十二首」の序(巻五)に「蘭」(らん)という別名でも登場します。

「初春の令月にして、気淑(よ)く風和(やわら)ぎ、梅は鏡前の粉を披(ひら)き、蘭は珮後(はいご)の香を薰(かお)らす」

「フジバカマ」の名を持つ植物が2種あることに注意

下の両者は「同じ種の別名」でなく「別種」です(村田源氏)。KESエコロジカルネットワークで保全するのは、絶滅の危険性が高い京都市産由来の自生種(左)です。

※詳細な見分け方は栽培セットとともにお渡しするテキストをご覧ください。



自生種

Eupatorium japonicum

水田や河川・湖沼の水辺
(草地)に自生

京都府RDB絶滅寸前種



栽培型(一般に流通)

Eupatorium fortunei

庭の植栽や切り花などに使われる。コバノフジバカマと呼ぶことが提唱されている。

フジバカマが結ぶネットワーク

藤袴と和の花展 2009年秋～



梅小路公園「朱雀の庭」

休耕田を利用した保全と鑑賞会



嵯峨水尾(2024年まで)



大原野(2024年まで)

1998年に数十年ぶりに京都市内で見つかった株を藤井肇氏が域外保全。これを元に、KBS京都や緑化協会などが挿し芽、鉢植えで保全し毎年秋に展示してきました。KESエコロジカルネットワーク参加団体のコーナーも設け、PRしています。



まちなかを彩る



藤袴祭（源氏藤袴会）



嵐電沿線・立命館大学（衣笠C）

フジバカマに訪花する渡りの蝶 アサギマダラ



海外との渡りをすることで知られる蝶アサギマダラ(タテハチョウ科マダラチョウ亜科、*Parantica sita*)は大型で、羽に浅葱(あさぎ)色がかかっている美しい蝶です。

春から夏にかけては日本列島を南方から北上し、世代交代したあと、秋に北の地方から南下します。フジバカマには蜜の成分を使って性フェロモンをつくるために、特にオスが多くやってきます。

この渡りのルートを明らかにするため、国際的な協力でマーキング調査が行われていて、京都市からも台湾などへ渡った個体がいくつも確認されています。

写真(上)は、数日前に滋賀県で捕獲され、水尾(右京区)で見つかった個体。

(撮影:秦賢二氏)



植物3 ヒオウギ

(アヤメ科 多年草)



学名 *Iris domestica*

日本のほか、台湾、朝鮮半島、中国大陸、インドなどにも広く分布します。

7月中旬ころから、祇園祭に合わせるように花茎がするすると伸び、赤い花を咲かせます。厄除け、魔除けとして街で飾られ、根茎は、風邪などに効く生薬「射干」(やかん)として重宝されました。名の由来は、葉の様子がヒノキ材の「檜扇」に似ているためとも、緋色から「緋扇」とも。

環境省RDB:記載なし

京都府RDB:絶滅寸前種(2022年版)

(京都府2015年版は「準絶滅危惧種」だったが2ランクも悪化)



トピック ダルマヒオウギの例(右)

祇園祭の「屏風祭り」で一般に飾られるのは、正確には、ヒオウギの変種ダルマヒオウギ。特に宮津市産が有名です。花色、葉の形は様々で、草丈は低く屋内の飾りに適しています。



ヒオウギの種子 むばたま、うばたま、むばたま (射干玉、烏羽玉)

漆黒で、黒髪のように艶があることから、黒、髪、夜、夢などの言葉にかかる「枕詞」に。生け花に使われることも。



茶菓子のモチーフにも。



和名の由来とな
った檜扇の例
(飾り檜扇)

うばたまの 我が黒髪や かはるらむ
鏡のかげに 降れる白雪
—— 紀貫之 (古今和歌集四六〇)
※かみやかは (紙屋川) が読み込まれている。

ぬばたまの 夜の更けぬれば 久木生うる ひさぎ
清き川原に 千鳥しば鳴く
—— 山部赤人 (万葉集九二五)

植物4 キクタニギク (キク科 多年草)



がけ地に自生するキクタニギク (西山)

学名 *Chrysanthemum seticuspe* (f. *boreale*)

本州・九州・四国の一部の府県、朝鮮半島・中国大陸(北部・東北部)に分布。

京都の東山から流れ出る菊溪(菊谷)川の河川敷に自生していたのが和名の由来ですが、現在、東山では野生は確認できません。

晩秋に明るい小さな花を次々と咲かせます。牧野富太郎は「アワコガネギク」の別名を付けました。若葉は清々しい香りがし、食用にも。花から精油をとって香料にしたり、江戸時代には油漬けにして傷薬にしました。

菊溪は江戸期の名所案内に数多く登場。本居宣長が没年に「古の人に契りを結びみん 住みける跡ときくの谷水」と読むなど、全国から多くの文人が訪れました。

環境省レッドリスト: 準絶滅危惧 (NT)

京都府レッドリスト: 絶滅危惧種

トピック

広義キク属のモデル生物 広島大学等による国家プロジェクト「NBRP 広義キク属」が進展。純系化されたモデル系統がゲノム解析され、キクタニギクは広義キク属のモデル生物に位置付けられました。

東山の森と街に広がるキクタニギク

京都传统文化の森推進協議会

「キクタニギクの花咲く菊溪の森づくり」

照葉樹林化し、暗くなった東山の森林を間伐し、明るくなった場所に、多くの市民、団体が参加してイロハモミジなど地域性種苗の苗木とキクタニギクが植えられています。キクタニギクは、**KESエコロジカルネットワーク**からの**提供株**が用いられています。

商店街、社寺等での展示 (円山公園キクタニギクプロジェクト)



2025年11月22日 京都新聞



植栽イベントは毎年3月頃に行われます



2026年2月28日 京都新聞

植物5 ノカンゾウ

(ススキノキ科またはワスレグサ科
多年草)



学名 *Hemerocallis fulva* var. *longituba*

7～8月にユリに似た、オレンジ～赤色の大きな一重の花を咲かせます。

本州以南、朝鮮半島、中国大陸北部に分布。府内では田のあぜ、堤防の草地などに分布していましたが、草刈りがなされないことなどが原因で、急激に自生地が失われました。

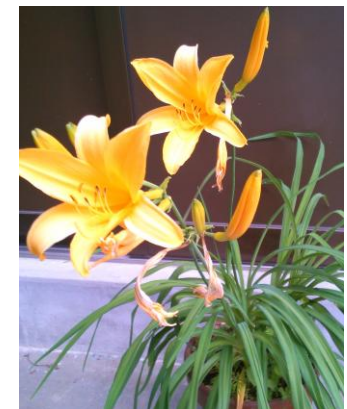
環境省レッドリスト: 記載なし

京都府レッドリスト: 絶滅危惧種

(2002年版レッドデータブックではランク外だった。)

ノカンゾウが属するヘメロカリス(ワスレグサ属)の仲間には、ヤブカンゾウ(八重咲きの帰化植物)、中部地方以北の標高の高い湿地に自生するニッコウキスゲ、小型で早咲きのヒメカンゾウ、京都府では絶滅したヒメノカンゾウなど、多くの変種や栽培品種をみます。

「ヘメロカリス」は「1日の美しさ」という意味で、いずれも1日花です。



ニッコウキスゲ

生活で利用、ストレスを和らげると親しまれる

新芽や花は山菜として、つぼみや根は薬用にされました。

「**忘れ草**」(忘憂草)の名で古くから親しまれ、新芽を食べる、あるいは、植えたり、種子などを身につけると、憂さや人恋しさを忘れられると信じられて、文芸作品にも数多く登場します。

また、近縁種**ヤブカンゾウ**は、中国大陸原産で、ノカンゾウとは異なり、種子をつけない植物です。このため、奈良時代以前に人々とともに渡来し、有用植物として、人々が各地に運んだのだろうと考えられています。

注目

ノカンゾウ、ヤブカンゾウとも、つぼみを摘み、蒸してから天日で乾燥したものは、「**金針菜**」と呼ばれ、民間では風邪、不眠症などに効くとされ、中華料理の薬膳料理にも使われます。



ヤブカンゾウ

植物6 ノハナショウブ (アヤメ科 多年草)



学名 *Iris ensata* var. *spontanea*

古くから園芸栽培で改良されてきた「ハナショウブ」に対する原種としてノハナショウブと呼ばれます。

花色(濃紫・淡紫・赤紫・白)の変異などが、多数の品種の作出に利用されてきました。

日本(北海道、本州、四国、九州)のほか、朝鮮半島、中国大陸東北部、シベリア東部に分布します。

環境省レッドリスト 記載なし
京都府レッドリスト 準絶滅危惧種

京都市内では、野生がわずかに残りますが、開発や遷移により、自生地の湿地(湿った草地)が消失し、また鹿の食害もあり希少になりつつあります。

注目

ハナショウブは、江戸前期までに6英(弁)の「せんよ」と呼ばれる多弁花が登場し、江戸、肥後、伊勢などで盛んに改良されていきました。

江戸の旗本で、「菖翁(しょうおう)」と名乗るほどの育種家だった松平定朝は、文政～天保年間にかけて京都に赴任。京都西町奉行の勤めの傍ら、宮中にもハナショウブを献上していました。

カキツバタ、アヤメとの見分け方

近縁のカキツバタ、アヤメとは姿が似ています。

カキツバタは水生、アヤメは陸生、ノハナショウブはその中間です。ノハナショウブの花の基部には、黄色の細長い三角形の模様が入り、カキツバタ、アヤメと区別できます。草丈はカキツバタ、アヤメより大きく、花期は、3種の中で最も遅く、梅雨期にも咲いています。

アヤメの原種の花色は紫で、花の基部には、黄色地に紫色の細い脈が文目(虎斑)の模様をつくり、3種の中で最も小型、葉が細身で真っ直ぐ伸びるのも特徴です。



アヤメの模様

「花菖蒲」はハナショウブ？

ややこしいことに、(ノ)ハナショウブは漢字で「(野)花菖蒲」と書き、アヤメは「文目」のほか「菖蒲」とも書きます。このため、古い文献では、アヤメやサトイモ科ショウブとの区別がつかないこともあります。和歌では、ショウブと区別するため、アヤメ又は(ノ)ハナショウブを「花あやめ」と呼ぶようになりました。

「花菖蒲」の表記は、古くは鎌倉時代の文芸に見られますが、現代に(ノ)ハナショウブと呼ばれる植物が、近縁種から明確に区別されたことが分かる記録は、室町後期(一条兼良「尺素往来」)が初めてで、その後も区別されないことが大半でした。



軒にサトイモ科ショウブを挿す「菖蒲葺く(あやめふく)」の風習。端午の節句に家や店で行われた。

ご案内

和の花など緑に関するご相談について

(公財)京都市都市緑化協会では、緑に関するご相談を受け付けています(無料)。KESエコロジカルネットワークで取り扱う「和の花」の育て方に関するご相談がありましたら、お気軽にご相談ください。

■育成の仕方について

花とみどりの相談所(梅小路公園内) 相談員 植村

水曜日・土曜日 10～12時、13時～16時(年末年始をのぞく。)

TEL 075-561-1980(相談所直通)

上記の時間外 075-561-1350 KESエコロジカルネットワーク担当

■保全・活用、緑のボランティア活動などについて

緑のまちづくり支援担当

月～土曜日 9～12時、13時～17時(年末年始をのぞく。)

TEL 075- 352-2535 /または 561-1350

(公財)京都市都市緑化協会